6．体験学習プログラム　～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～

センターは、学生が長期休暇を利用して国内の地域や治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、地域貢献、福祉、環境関連の現地NPO・NGOなどとの交流を通して、その課題解決の取り組みなどを学ぶ「体験学習プログラム」を、夏季と春季の休暇期間に実施しています。

異文化間における相互理解と共生を学ぶ海外プログラムでは、本学の専任教員が企画・引率する1プログラムと、NPO・NGO団体が実施する海外のスタディツアーの中から採択した、学生にとって学びの多い2プログラムを実施しました。

また、海外に比べて費用面でも参加しやすい国内プログラムでは、地域のさまざまな課題に目を向け視野を広げる内容で、本学の専任教員が企画･引率するものを1プログラム、センターのボランティアコーディネーターが地域の団体と協力して企画するものを2プログラム実施しました。

全コースが終了した後に実施する参加学生によるふりかえりを兼ねた報告会までを一連のプログラムとしており、報告会を通じてプログラムで得た経験を共有し、各自がさらに学びを深める機会となるだけでなく、報告会に出席した学生が次回のプログラムの参加を考えるきっかけになっています。

		プログラム企画者・団体	行　先	テーマ	実施期間	人数
国内		特定非営利活動法人 泉京・垂井	岐阜県揖斐川流域・垂井町	フェアトレードタウンを目指す町　垂井　～揖斐川流域から提案する穏豊（おんぽう）な社会～	2015年 9月3日（木）～ 9月6日（日） 4日間	15名
		社会学部　教授 筒井　のり子	福島県福島市、南相馬市、本宮市、郡山市	福島スタディツアー　～福島の「今」を見､福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～	2016年 2月22日（月）～ 2月25日（木） 4日間	15名
		特定非営利活動法人 地球デザインスクール	京都府丹後地方	丹後に出会う　～地域資源（人・自然・歴史・文化）の活かし方～	2016年 3月13日（月）～ 3月16日（水） 4日間	15名
海外	学内企画	法学部　教授 西倉　一喜	台湾	台湾で市民社会を問い直す ～行動する市民・学生と交流する旅～	2015年 9月2日（水）～ 9月8日（火） 7日間	8名
	学外企画	ツナミクラフト	タイ王国	“新しい復興のカタチ”を訪ねる旅　～インド洋大津波の被災地を訪ね、ネパールや日本に活かす～	2015年 8月27日（木）～ 9月4日（金） 9日間	4名
		公益社団法人 全国愛農会	インド共和国	持続可能な暮らしと農業を考えるインドの旅	2016年 3月1日（火）～ 3月10日（木） 10日間	5名

○国内体験学習プログラム／岐阜県揖斐川流域【夏季】

■参加学生	
赤井　由佳（文学部　臨床心理学科　3年次生）	今井　夏帆（政策学部　政策学科　3年次生）
岡田　達也（法学部　法律学科　2年次生）	川口　　栞（社会学部　コミュニティマネジメント学科3年次生）
佐野　　颯（経済学部　国際経済学科　3年次生）	高尾　桃子（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）
中島　亞弓（文学部　日本語日本文学科　3年次生）	西岡　佐苗（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）
乗矢　隆良（政策学部　政策学科　1年次生）	橋本　優子（経済学部　現代経済学科　3年次生）
福田　七海（社会学部　地域福祉学科　3年次生）	藤森　真教（文学部　真宗学科　1年次生）
松坂　智彰（政策学部　政策学科　1年次生）	三輪　可那子（国際文化学部　国際文化学科　2年次生）
毛利　美咲（社会学部　地域福祉学科　4年次生）	
■テーマ「フェアトレードタウンを目指す町　垂井～揖斐川流域から提案する穏豊（おんぽう）な社会」	
■協力団体　NPO法人泉京・垂井	

■行　程

日　時		行　程	場　所
9月3日（木） 引率：神田浩史氏	8：00	深草キャンパスを出発	
	8：15	JR 京都駅経由にて垂井町へ	
	10：30	神田氏と合流	揖斐川町ふじはし道の駅
	12：00	昼食	徳山会館（旧徳山村郷土料理地獄うどん定食）
	13：00	徳山ダム　見学	徳山ダム
	15：00	山村生活講話 旧坂内村　元村長　田中正敏氏	揖斐川町坂内諸家地区　竹姿庵
	17：00	ぎふいび生活楽校　小林正美校長のおはなし「廃校活用の取り組み」	ラーニングアーバー横蔵・樹庵
	19：00	関係者との BBQ 交流会	ラーニングアーバー横蔵・樹庵
	22：00	入浴、就寝	
9月4日（金） 引率：神田浩史氏	7：00	朝食	食堂
	8：00	出発	樹庵マイクロバス
	8：54	養老鉄道揖斐駅から垂井まで電車移動	揖斐駅～（養老鉄道）～大垣駅～（JR 東海道線）～垂井駅
	10：00	垂井町散策 街角案内　不破章雄氏	垂井町垂井地区、宮代地区
	12：00	昼食	みずのわ
	14：00	フェアトレード学生サミットに参加	垂井町表佐公民館
	14：10	アイスブレーク	垂井町表佐公民館
	15：30	フェアトレードについての学び	垂井町表佐公民館
	17：00	フェアトレード団体紹介	垂井町表佐公民館
	18：45	食事、入浴	いのしし亭
9月5日（土） 引率：神田浩史氏	7：00	朝食	
	9：00	垂井町まちあるき	垂井町表佐地区
	12：00	昼食	
	13：00	講演・ディスカッション （原田さとみ氏、神田浩史氏）	垂井町表佐公民館
	15：00	垂井町コラボ企画（垂井町長、議会議長、議員、町職員とのディスカッション）	垂井町表佐公民館
	18：00	アクションプラン作成	垂井町表佐公民館
	19：00	夕食、入浴	いのしし亭
		アクションプラン作成	
9月6日（日） 引率：神田浩史氏	7：00	朝食、荷造り、チェックアウトいのしし亭	
	10：00	アクションプラン作成	垂井町中央公民館
	11：30	昼食	垂井町中央公民館
	12：30	アクションプランの発表	垂井町中央公民館
	15：30	表彰、閉会式	垂井町中央公民館
	16：00	出発（バスの中でふりかえり、今後の日程確認）	
	19：00	京都での帰着解散	

赤井　由佳
（文学部　臨床心理学科　3年次生）

9月3日、岐阜県揖斐川流域への4日間のプログラムに出発しました。今回様々な経験をしましたがその中でも特に印象深かった、徳山ダムとフェアトレードについて報告します。

徳山ダムはただただ大きく圧巻でした。私もこのプログラムに参加していなかったら、大きいとだけ感じて帰っていたと思います。村が一つ消された、というそこに隠された歴史はとても悲しいもので、移転先の居住者の高齢化も進んでいます。どうかこのことが忘れ去られないでいてほしいと思います。都会のことばかりに目を向けていたら、こんなことに気づけなかったと思うと恐ろしいですが、今回知ることができて本当に良かったです。2日目からのフェアトレード学生サミットは、全国の学生と交流会やワークショップがたくさんあり濃い毎日でした。フェアトレードをもっと広めたいという熱い思いをもった全国の学生と話すことで、自分も何か社会に対してできることがあるのではないか、と考えさせられました。

徳山ダム　緑に囲まれてまるで森林浴をしているようでした

今井　夏帆
（政策学部　政策学科　3年次生）

私は地域づくりや環境、フェアトレードに興味があり、このプログラムに参加しました。特に印象に残ったことは次の二つです。

一つ目は農村地域の良さを知ることができ、ダムに対する印象が変わったことです。このプログラムに参加した時はダムに対する知識がなかったので、ダム建設におけるマイナス面を知り驚きました。ダム見学の後の住民とのヒアリングで地域には地域なりの良さがしっかりとあることが分かり、今後に活かしていくべき問題だと感じました。

二つ目はフェアトレードと地域づくりの考え方に関してです。フェアトレードは地産地消とつながり、地域活性化につながるということを知り驚きました。現在フェアトレードには多くの人が関わっていて人の縁を広げていると感じました。その規模が大きくなっていって地産地消や地域活性化にもつながるのだろうと考えました。このプログラムで多くのことを学んだので今後も継続して学んでいきたいです。

みずのわで購入できるフェアトレード商品

岡田　達也
（法学部　法律学科　2年次生）

私は龍谷大学町家キャンパスを拠点に地元の人たちとイベントを行い、交流のための場づくりをしています。フェアトレードタウンを目指している垂井町の町づくりを活動の参考にしたいと思い、今回のプログラムに参加しました。2日目の垂井町散策の際に、休憩のためある施設に入りました。ふれあいプラザ「夢の屋」という場所で、コーヒー、紅茶を1杯百円で飲むことができ、誰でも気軽に入ることができる所でした。中にはおじいちゃん、おばあちゃんが6人程いてくつろいでいました。私はその様子を見て自分たちの町屋もこんな風にしたいと思いました。町家は今イベントを実施する時以外、人が訪れてきていません。地元の高齢者の方だ

ふれあいプラザ「夢の屋」
とてもアットホームで落ち着いて休める交流の場所

けでなく、中高校生や小学生、誰でも気軽に立ち寄れ、休める場所になれば、同世代の人だけでなく、普段関わることのない世代の人との交流の場となります。このような人の集まる「場づくり」を今後の目標としていきたいです。

川口　栞
（社会学部　コミュニティマネジメント学科　3年次生）

穏やかで豊かな社会について学ぶため、訪れた先で様々な方からお話を伺った。フェアトレード学生サミットに参加し、同世代の学生が日本各地でフェアトレード（以下FT）について様々な取り組みを行っていること、彼らのこれからのビジョンなどを聞き、驚きと憧れを感じた。また、新しい学びとしては、「反対の意見を受け入れる」ということである。ディスカッションを行った際に、全ての人がFTを推進しているわけではないということに気づかされた。私達は周りの影響を受けやすく、自分よがりの意見を突き通そうとすることがある。そのような時、違う考え方、反対の考え方を持った人の意見を取り入れることは、逆に自分の考えをさらに磨き上げることに繋がるのではないか。そして、それは反対の意見を持つ人を賛成に変える手がかりになるかもしれない。穏やかで豊かな社会を目指すためには、暮らしのあり方を常に意識する事、自分の考え方を一度違う視点か考えてみることが必要とされるのではないか、と考えた。

廃校を利用したラーニングアーバー横蔵・樹庵

佐野　颯
（経済学部　国際経済学科　3年次生）

今回のプログラムで少なからず成長を感じることが出来ました。初日に徳山ダムの見学をして、引率の神田さんからダムの厳しい現状について聞きました。徳山会館では、ダムの影響で水没した徳山村のことを聞き、地域住民は反対していたが、それが国民の問題意識にはならなかったというところは、どの地方においても共通する課題ではないかと思いました。また、ダムで水没した徳山村で力仕事をしていた高齢者男性たちが移住後にやることがなくなり、認知症になった人が多かったという話を聞いて、移住後のことを考えていなかったことにやるせない気持ちがわいてきました。揖斐川町坂内村の元村長のお話の中で林業が廃れて定期的に木を切ることがなくなり、山は水はけが悪くなり、土砂崩れが頻繁に起こるという話がありました。安さばかり追い求めて海外の木材を輸入していたので、これからの私たちは目先のことではなく将来を見据えて日本、国民のために考えなければならないと感じました。

徳山ダムの全景

高尾　桃子
（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）

この4日間では、さまざまな人と出会ったり、実際に現地を訪れたりするなかでとても多くのことを考えさせられました。

サミットでは、フェアトレードについての知識を学んだだけでなく、他大学の学生との交流を通じて、学生のネットワークを活かせばアイディアや工夫次第で社会を変える大きなちからになれるのだということ、学生一人ひとりがもつ行動力やその影響力の大きさを実感することが出来ました。

このプログラム全体を通して学んだことは、一人ひとりが持続可能な社会、循環型社会を可能にしていくため、将来の世代のことを見据えた行動をとらなければならないということです。今回、自分のごく身近なことから世界や地域社会に貢献できるたくさんの方法を学びました。まずは、身近なことからそれらを実際に行動に移していきたいです。

プレゼンテーション本番の前夜
グループのみんなと夜中まで話し合った

中島　亞弓
（文学部　日本語日本文学科　3年次生）

国内体験学習プログラムに参加し、多くのことを学んだ。特に強く印象に残ったのは、「まちづくり」についてだ。徳山ダムの見学や揖斐川上流域の旧坂内村元村長の田中さんのお話では、過疎化や間伐材の利用についての問題について考えさせられた。しかし、この問題には国の政策が必要不可欠であり、困難を極めていることがわかった。垂井町の散策では、綺麗な水、夢の屋という交流の場としてのカフェが魅力的であった。フェアトレードの学生サミットでは、全国の学生の、人の力になりたいという意思、意識の高さに驚いた。垂井町コラボという垂井町長や議会の方々との意見交流では、様々な角度からの見方や考えがあることを体験した。垂井町では、「フェアトレード×地産地消」の取組みもされており、地域活性化にも繋がり画期的であると思う。たくさんの課題を発見し、考え方も変わり、残りの学生生活の過ごし方について考える良いきっかけとなった。

フェアトレードの商品がたくさん置いてある
みずのわ垂井町散策にて

西岡　佐苗
（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）

揖斐川流域での暮らし、フェアトレードタウンを目指す垂井町の取り組み、そして他大学学生との交流を経て、様々なことを学んだとても濃い4日間でした。現代日本が抱える過疎化や高齢化の問題をどうメリットに変えようとしているのかを自分の目で学ぶことができました。フェアトレードタウンを目指すことにおいては、地元の方への発信がより重要であること、地産地消をキーワードに地元の方と自治体の方との繋がりを強めることがフェアトレードタウン実現につながるのではないかと思います。また学生サミットに参加し、フェアトレードに関心のある他大学の学生と意見交換することは、とても新鮮で新しい発見も多くありました。4日間、知識不足でついていくのに必死でしたが、今後フェアトレードに関するイベントには積極的に参加し、学び続けたいと思います。

学生サミットで行われたアクションプラン

乗矢　隆良
（政策学部　政策学科　1年次生）

9月3日～6日、私は国内体験学習プログラムに参加した。プログラムはフェアトレードタウンを目指す町、岐阜県垂井町に行き、フェアトレードや地産地消に対して知識を深めようという内容だった。「フェアトレード」という言葉を聞いたことがあるだろうか。フェアトレード

徳山会館で食べた郷土料理の「地獄うどん定食」

とは、開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す「貿易のしくみ」をいう。（Fairtrade Label Japan HPより）実を言うと、私はその言葉を大学の講義で聞いたことがあったが、フェアトレードの詳しい内容までは知らなかったのである。しかし、このプログラムで全国の学生との交流を通して知識を深めることができた。

橋本　優子
（経済学部　現代経済学科　3年次生）

夏季国内体験学習プログラムに参加して、とても充実した濃い4日間になった。その中でも徳山村、養老鉄道、そして学生フェアトレードサミットがとても印象に残った。たくさんの話を聞き、いろいろ考えることができた。徳山村や垂井町では人とのつながりについて考えさせられた。ダムができることによって自分たちの住んでいた場所がなくなるということを自分事として感じた。養老鉄道では廃線の危機にある路線に実際に乗車したのだが、住民の人たちは必要としているのではないかと感じた。学生フェアトレードに参加して全国の学生と話す機会が持て、自分の考えの浅さを感じた。町長や議員さんとお話しする機会があって今後こんな機会はないのではないかと思う体験ができた。私たちの考えを伝えることでまわりの考えが変わることを実感した。

養老鉄道　揖斐駅

福田　七海
（社会学部　地域福祉学科　3年次生）

昨年度実施された同プログラムで訪れた垂井町が新しい取り組みをしようとしている。フェアトレードからまちづくりを進めようとしている。今年のプログラムに興味を持ち、どのような取り組みが行われているのかを知りたかったので参加した。「フェアトレード学生サミット」やその中での神田さんや原田さとみさんの言葉が印象に残ったが、うまくまちづくりと結びつけることが難しかった。自分なりにこういうことなのかと考える。フェアトレードの考えがあったとしても、フェアトレードの商品のデザインや品質を大事にすることは大切で、つまり選んで商品を買って地域でそのお金が回る生産や流通へ意識を向け、その流れを考えるという点でまちづくりとは切り離せない。今後も自分なりに考えを深めていきたい。

フェアトレード学生サミットの様子

藤森　真教
（文学部　真宗学科　1年次生）

参加のきっかけは単純な思いでそれからプログラムの内容が気になり垂井町の事が知りたくなりフェアトレードのことを勉強するようになった。ダムの話で沈みゆく村の事を聞き、廃校の活用方法も勉強になった。学生サミットがあり町長や議員との話し合い、アクションプランの作成、発表などがあった。

3泊4日は長いと思ったが、終わってみればあっという間で、最後はみんなと別れるのが寂しく涙が出そうな思いだった。今回のプログラムで感じたことは、学生の間しか出来ない事や学生だから出来る事があるので、もっとチャレンジしていきたいということ、そしていろんな事柄を違う角度から見て、もっと様々な経験、考え方を学んでいきたいと思った。

フェアトレード学生サミットで参加学生を代表して感想を発表

松坂　智彰
（政策学部　政策学科　1年次生）

この国内体験学習プログラムで一番印象深いのは、フェアトレード学生サミットだ。学生一人一人がフェアトレードに対して、なにがしかのイメージを抱いており、知ったきっかけや、フェアトレードのどこに興味があるかも様々で、フェアトレードという言葉にまとめられているだけであって、色々な事象が絡み合っている複雑な社会問題であることが分かった。国内体験学習プログラムの後、学生サミットに参加していた人に進められた本を読んだ。その本に書かれていた内容は、フェアトレードのマイナス面についてだった。学生サミットでは、フェアトレードの良い面ばかり見えていたので、その本に書かれていたことは、フェアトレードについてさらに考えていく上で重要な材料になった。今回の国内体験で学んだこと、とても3泊4日で理解することは不可能だ。次はもっと知識をつけた上でフェアトレード学生サミットに参加したい。

徳山ダムの建設によって沈んだ徳山村の元住民のかたからお話しを伺っている

三輪　可那子
（国際文化学部　国際文化学科　2年次生）

今回の夏季国内体験学習プログラムを通して、多くの出会いや学びを得ることができ、穏豊な社会とは、フェアトレードとはどういうものか、理解を深められた。これらのことについて更に知りたい、学びたいという思いも生まれた。1日目の徳山ダム見学や2日目のフェアトレード学生サミットへの参加を通して、物事のマイナス面を知ることは非常に重要であることを改めて感じた。特にフェアトレードについては、基本的なこともよく理解していなかったが、本プログラムを通して、フェアトレードにおけるメリットとデメリットの両面を更に知る必要があると思った。この4日間で得た多くのエネルギーを無駄にすることなく、今後の学生生活に生かしていきたい。

ダム建設によってできた徳山湖

毛利　美咲
（社会学部　地域福祉学科　4年次生）

今回で3回目の垂井町訪問でしたが、今回参加するにあたって①フェアトレードとはどういうものなのか②なぜ垂井町がフェアトレードタウンを目指しているのか③フェアトレードタウンになることでどのような影響があるのかを知り、考えることを目標に挙げました。また全国の学生が集まるということで、お互いに情報交換したいというもう一つの目標を持ち、4日間を過ごしました。

プログラムの前半では徳山ダムや旧坂内村への訪問、そしてラーニングアーバー横蔵・樹庵での小林校長からのお話し、地域の方々との楽しい交流会、垂井地区の散策を垂井町街角案内の会の不破さんにしていていただき、垂井町の特徴などを学びました。

後半ではフェアトレードについて全国の大学生たちと一緒に学びながら、考え、議員の方々との交流やアクションプランで意見を出し合うなど人生で初めての経験を積むことが出来ました。

NPO 法人泉京・垂井が運営するフェアトレードショップみずのわ

○国内体験学習プログラム／福島県【春季】

■参加学生	
井嶋　紫乃(国際文化学部　国際文化学科　3年次生)	中島　英里(文学部　仏教学科　3年次生)
岡本　聖也(社会学部　地域福祉学科　2年次生)	名倉　誠也(文学部　仏教史学科　1年次生)
岡本　龍吾(理工学部　電子情報学科　2年次生)	野中　学志(国際文化学部　国際文化学科　2年次生)
川辺　実和(農学部　食品栄養学科　1年次生)	樋口　朝香(国際文化学部　国際文化学科　3年次生)
酒井　　遥(政策学部　政策学科　3年次生)	松岡　亮祐(国際文化学部　国際文化学科　2年次生)
田川　智也(理工学部　電子情報学科　2年次生)	松下　実代(農学部　食品栄養学科　1年次生)
徳本　恵理(文学部　仏教史学科　2年次生)	余根田　敦(国際文化学部　国際文化学科　3年次生)
中井　歳三(文学部　仏教史学科　1年次生)	
■引率教員、テーマ	
筒井のり子　教授（社会学部）「福島スタディツアー」 ～福島の“今”を見、福島を生きる人々の“言葉”を聴き、そして“自分”を見つめる～	

■行　程

日　時		行　程	場　所
2月22日（月）	8：00	深草キャンパス出発	
	19：00	福島市の宿舎に到着。	ユースゲストハウス
	21：00	NPO法人うつくしまブランチの皆さんと夕食会を行った後、お話を聴く 入浴・就寝	
2月23日（火）	9：00	宿を出発し、 阿部農園訪問	阿部農園の梨畑
	11：00	飯館村訪問。極久里（あぐり）珈琲の方からお話を聴く	道の駅　南相馬
	13：00	昼食	
	14：00	南相馬市社会福祉協議会を訪問	南相馬市社会福祉協議会
	15：00	被害状況や建材の取組についてお話を伺った後、南相馬市の沿岸部を案内していただく	
	16：00	南相馬市の宿舎に到着	農家民泊　いちばん星
	16：30	ふりかえり	
	19：00	夕食	
	19：30	ゲストの皆さん（南相馬市社会福祉協議会とデイさぽーとぴーなつの方）と交流	
	21：30	入浴・就寝	
2月24日（水）	9：10	いちばん星発	
	9：30	「デイさぽーと　ぴーなっつ」青田由幸氏を訪問し、現在の取組についてお話していただく	カフェ・ビーンズ（南相馬市立中央図書館・市民情報交流センター内）
	10：30	国道6号線（沿岸部）を南下。Jビレッジ経由で本宮市に移動	
	13：00	本宮市で昼食	食の工房　大観
	14：30	恵向公園応急仮設住宅に訪問し、住民の方と交流	恵向公園応急仮設住宅・集会所
	16：50	郡山市の宿舎に到着	郡山温泉
	17：10	ふりかえり	
	19：00	夕食	
	20：00	入浴・就寝	
2月25日（木）	8：30	宿を出発	
	9：00	はみんぐBirdのみなさんと交流	郡山市中央公民館
	10：00	京都に向けて出発	
	19：30	京都駅着	

井嶋　紫乃
（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）

福島のスタディツアーでは、“対話”の重要性を再確認させられるものであった。インターネット、新聞、テレビ、いずれも重要な情報源であるが、しかしその多くは様々なフィルターにかけられていることが多い。

このスタディツアーでは、福島の“復興”を目指し、奮闘する様々な人の話を聞くことができた。それらは、今まで本やテレビで聞いたことなどを裏付ける話も 多かったものの、知らなかったことや、出回っている情報と異なる話も多く聞くことができた。また、話を聞くだけではなく、実際の状況を見て、感じて、自分の体感を通して、本当の復興とは何なのか、行政によって行われている“復興政策“は本当に正しいのだろうか。ということを考えることができた。

また、聞く側の私たちだけでなく話す側の現地の方々にとっても、自分の記憶を整理し、体験を伝え、話すことで自分の本当の意見をまとめることができる、という貴重な場になったと感じた。

バスから見た風景

岡本　聖也
（社会学部　地域福祉学科　2年次生）

今回福島に行かせて頂き、とても有意義な時を過ごせ良かったと思います。

全体を通して知れたことは数多く、話を聞かせて頂いた方々に本当に感謝です。その場その場での様々な想いも伝えられ、私の中でのいろんな考えが交錯しました。その中でも解決困難な問題の量の多さ、風評被害の酷さについては特に悩まされました。そして、それら全てに対応できる万能策もたてられない現実を知り、今私達が出来ることは何かと考えた結果「知ることの大切さ」に結び付きました。

人は支え合って生きていくべきであり、せめてより多くの方にこの現状を知ってもらい風評被害をなくしていけたら良いと思います。

この写真は除染作業で出た汚染土が積み上げられている写真です。量がとても莫大で印象的でした。

岡本　龍吾
（理工学部　電子情報学科　2年次生）

福島スタディツアーに参加して、最も印象に残ったのは、バスの車窓から見えた汚染土の山でした。メディアではあまり大々的に映し出されなかった現状が一面に広がっていました。NPO 法人うつくしまブランチの掃部さんは目に見えない恐怖がいつもあると仰っていました。まだ、完全な安心を得られず、家にも帰れない人がたくさんいるというあまりにも過酷な現実を見せられました。原発は決して他人ごとではなく、日々電気を使って生活する私たちが目を背けてはならない問題だと考えました。また、自分の身にも起こりうる災害であるため、

農園の一角に積み上げられた汚染土

非常に興味深く学ぶことができました。災害時、自分ならどうするかということを日々考え、学んでいきたいと思いました。

川辺　実和
（農学部　食品栄養学科　1年次生）

初めての被災地。全てが刺激的だった。放射線が身近にある生活。その中で苦しみ、戦い続ける人々がいることも知らず、私はこの5年間を過ごしてきたということがショックだった。「無知は罪」ツアーの中で聞いたこの言葉が胸に突き刺さった。

また、原発について一番知るべき地元の人々にさえ、知らされない情報がある事実に驚いた。情報を鵜呑みにせず、多角的視点を持つことが大切であり、私達にとって現地に生きる人々の声を聴くことはとても価値のあることだと思った。

飯舘村を訪れた際には、以前に本で見た飯舘村とは全く異なる風景に、悲しさと悔しさで胸が締め付けられる思いだった。

今回のツアーで、支援する側、される側という関係を超えて共に考え、現実に向き合い続けることが大切だと思った。福島との繋がりを絶やさずにいたい。繋がりが、他人事を他人事では無くさせた。今私は、福島を発信しなければ、という使命感を感じている。

放射線量を測るガイガーカウンター。一番数値が高かった雨樋の下。（単位 mSv）

酒井　遥
（政策学部　政策学科　3年次生）

今回の福島スタディツアーに参加して一番学んだことは、新聞やテレビなどのメディアや伝聞からで与えられた情報だけで知ったつもりになるのではなく、自分なりにそのことについて調べることの必要性である。このことは、福島で出会った様々な立場の人たちからの話を聞き、地震や津波の被害を受けた所や、放射能に汚染された地域を視察して、自分は福島のことについて知っている気になっていただけで、実は何も知らなかったことに気付いたからだ。

そして、福島で起こっていることは、自分に関係ないのではなく、自分の身近な問題であることを意識して、他人事として考えるのではなく、自分自身の問題でもあることとして、自分で調べて学ぶことが重要であると感じた。

テレビでしか見たことのなかった、汚染土のフレコンバック

田川　智也
（理工学部　電子情報学科　2年次生）

私が福島に行き、4日間のプログラムを通して、学んだことは“正しく怖がることが大切である”ということです。数々の本で綴られている言葉ですが、現地に行くことにより、初めてこの言葉の本当の意味を理解できた気がします。

放射線についての話、除染作業の話、今も避難生活を送っている方々の話は、普段何気なく過ごしている私たちには、あまりに非現実的な話で、実際に現地に行って、今も悩み続けている方々の話をきいて、初めて理解できることだと思います。そこで、今回国内体験で福島に行く機会を頂いた私に、まずできることは、この経験を伝えることだと考えました。伝えるため

仮設住宅での交流会の様子

には、正しい知識を身に付けることが大切であるので、これからも考え悩み続けていきたいです。また、理工学部に所属しているので、何かを生み出す際には、利便性を求めるだけでなく、その背景にある恐れについてまで考えることが大切であると学びました。

徳本　恵理
（文学部　仏教史学科　2年次生）

私は福島で多くのことを学んだ。具体的には知ることの大切さ、自分の命の大切さ、福島の魅力などさまざまだ。今回のツアーを通して、自身の知らなかったことを知ることができたのは私にとってとてもプラスになった。ボランティアは相手の立場に立って考え、一緒に悩み行動することであると学んだが、それはボランティア以外のことにも言えるのではないかと考えた。普段自分が過ごしている中にも見落としていたものがたくさんあったことに気付けたのも、今回のツアーに参加したからこそであるように思う。

バスから見た南相馬市沿岸部の様子

中井　歳三
（文学部　仏教史学科　1年次生）

福島で被災した人のほとんどにそれぞれの3月11日、そして原発や放射能との戦いがあるように感じました。その“生の声”は、実際に私たち全員が考えさせられるものばかりでした。これには正解とかはないし、みんながそれぞれのやり方で元の生活に戻れることを願いつつ日々を送っているのだと思いました。

このツアーに参加する前の私がそうだったように、福島の外にいる人たちの目には、震災の影響やそこにいる人たちが写っていないように思います。恐らく、福島に行ってなかったらこんな事を感じなかったと思います。これは、このツアーに参加し、いろいろな見方、情報そして“生の声”を聞いたからだと思います。こうして考えると、私は、福島を知ることが福島の外にいる私たちにできる復興支援なのかも知れません。このことだけが正解とは思いません。しかし、福島を知り、復興を少しでも前に進める、そのことがなにより大切であると私は信じています。

阿部農園の梨木。放射能を除染するために木の皮を剥いだ所を見せていただいた。

中島　英里
（文学部　仏教学科　3年次生）

福島で一番驚いたのは、汚染土の詰められた真っ黒で大きな袋が、広い土地に積み重ね、並べられている光景である。これまでは、汚染作業が順調に進んでいると思っていたのだが、目に見える場所に延々と汚染土の入った袋が並べられているのを見て、順調だとは思わなくなった。

津波の被害と原発の被害の両方にあった地域は、津波の爪痕が残されたままであった。瓦礫は撤去されたものの、新しく再築された建物はほとんどなく、何もない空き地が遠くまで続いていた。

広範囲にわたり、汚染土の入った袋が山積みにされている。

それから、福島の方々が、5〜10回の避難を繰り返しているということにも大変驚いた。避難生活は今でも続き不安を抱えている方がたくさんいる。

この状況の中で必要なのは、心の復興であると考えている。心の復興をしていくには一体どのような支援が必要なのか、自分にもできることがあるのではないか。このことをしっかりと考え、悩み、福島で生きる方々の心に寄り添っていきたい。

名倉　誠也
（文学部　仏教史学科　1年次生）

福島スタディツアーに行く前、福島の復興状況などテレビ、新聞で調べてスタディツアーに臨んだ。だが実際、自分の目で見た福島は、マスメディアで見た福島とかけ離れていた。福島に住んでいる人々の声や想いを聞いていると、自分がいかに無知だったことを知った。

私たちは、東日本大震災が起き、甚大な被害を起こしたことは知っている。でも、汚染された土を保管する場所が無く、町のいたるところにまだ放置されていることを知らない。五年たった今でも、自分の故郷に帰りたくても帰れない人々がいることを知らない。私たちは福島のことを知っているようで知らなかった。

ただ私は福島スタディツアーに行くことでたくさんのこと知った。なので、今回で知ったこと、感じたことを自分の中で留めるのではなくみんなに伝えたいと思う。4月の半ばに報告会がある。伝えることは簡単ではないが1人でも多くの人々に福島のことを知ってほしい。

放射能により汚染された土。処理されたはいいが保管場所がまだ決まらず、町のいたるところこのような風景が見られる。

野中　学志
（国際文化学部　国際文化学科　2年次生）

東日本大震災と原発事故から5年が経ち、自分の中でも日が経つにつれ、そのことについて興味や関心が薄れていったことは事実だった。そんな中参加したこのスタディツアーでは、仮設住宅に避難している人たちや、農家の方、ボランティアを受け入れる立場にあった方たちなど、震災や原発事故による放射能に苦しむ様々な状況に置かれている人たちの話や、ニュースではあまりみることのできない原発から距離の近いところで見た、津波の被害がそのままとなっている建物や除染が行われている光景は、自分にとってかなり衝撃的なものであった。メディア等で復興が進んでいると言われている状況の中で参加したこのスタディツアーを通して聞き、見た光景は、実際には復興とは程遠いものであり、本当の復興にはまだまだ時間がかかるのではないかと感じた。

除染が行われていることを示す旗。これも町のいたるとこで見られた。

樋口　朝香
（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）

今年3月11日、東日本大震災から5年が経った。そして同時に、福島第一原発の爆発事故からも5年が経った。5年という時が流れたいま、本当の福島の姿はどのようなものなのか。私はこの4日間福島のありのままの姿を見つめ、福島で生きる人々の言葉に耳を傾け、そして悩み続けた。自分の想像を大きく超える福島の姿や複雑に絡み合う多くの問題を目の前に、私は自分の無力さを痛感し、その中で多くのことを学んだ。福島で生きる人々の強さ、そして温かさ。その一方で報道されにくくなった復興に向かって進めない人々の存在。福島の人々は私たち若い世代に、大切なことを教えてくださったと感じる。福島のいまを見て、聞いて、感じた現在、自分たちにできること、自分たちがやらなけれ

ばならないことを考える必要が私たちにはあると思う。

阿部農園にて阿部一子さんからお話を伺う

松岡　亮祐
（国際文化学部　国際文化学科　2年次生）

5年経った今では、震災に関する報道が少なくなってしまい、被災地の情報はほとんど伝えられなくなったが、実際のところ復興したとは言い難いものである。被災地の方々からすれば、何が復興で何がゴールなのかわからない状況であるのが現実だ。

被災者の方々はコミュニティを大切にしており、情報を共有したりする場を欲している。加えて、憩いの場としての機能も備えているコミュニティや組織の存在が被災者の方々を支えているという印象を受けた。人は支え合い生きていることを今一度再認識させられた。また「てんでんこ」という意識のおかげで津波の被害者を減らすことができたと共に、さらに拡充していればより多くの命を救うことができたのではないかと考えさせられた。その際、都市部で地震が起こることを考えずにはいられなくなり、もし南海トラフ地震などが起こったときに、「てんでんこ」や地域間でのコミュニティの存在がない都市部において被害が甚大なものになるだろう。

訪問した仮設住宅での一枚。暮らしているのは高齢の方が多い印象だった。この仮設住宅はとても綺麗な方だと言われている。

松下　実代
（農学部　食品栄養学科　1年次生）

“フクシマ”で目の当たりにした現状は、メディアで見るような明るく復興へと向かう被災地とはかけ離れたものだった。何をするにも放射能が付きまとう生活や、決して戻ることのない美しい暮らしと、引き裂かれた人と人とのつながり。そこに住む人々の悲しみや怒り、苦悩、恐怖、そして大量の放射能汚染土とともに山積みになった問題はとてつもなく大きく深いものだった。

ただ私にできることは、良いことも悪いことも、そこで感じたことをありのままに伝えること。流れてくる情報を鵜呑みにせず、真実を知ろうと努力し、目をそらさずに注目し続けること。そして自分の頭で考え、決断し責任をもって行動することだ。

そこで出会った人たちは、もう決して何者にも操作されまいと、もがいていたように思う。その姿はとにかくかっこよかった。ツアーに参加し、たくさんの人と出会うことができて本当によかった。私はどこででも大好きな福島を語りたいと強く思う。特にフェアトレードについては、基本的なこともよく理解していなかったが、本プログラムを通して、フェアトレードにおけるメリットとデメリットの両面を更に知る必要があると思った。この4日間で得た多くのエネルギーを無駄にすることなく、今後の学生生活に生かしていきたい。

非難区域では主要道路以外は封鎖され、人が入らないように警備を行なっている（奥にある黒い塊は放射能汚染土）

余根田　敦
（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）

2016年2月22日～25日で福島県を訪れた時に感じた、私自身の東日本大震災に対する他人事としての意識。そうであると、このスタディツアーは教えてくれたように思う。誰にでも起こり得ることであるだけに、この震災がもたらした事実と向き合い、その本質を見極めることは、私にとって非常に重要な問題である。形式的ではなく、心と心がつながるような関係を築いていきたい。

はみんぐ Bird の皆さんからは、震災が起こった状況下での子育てについてお話を伺った。子どもというかけがえのない存在を必死に守り、育ててきた姿に、私は何も言葉が思い浮かばず、ただ目頭が熱くなるばかりであった。

当たり前が当たり前ではなく、その裏側には多くの支えあいがあり、今を生きている。そのことへの感謝の気持ちを忘れることなく、一日一日を大切にしていきたいと私は思う。このプログラムで経験したことを私なりに振り返り、東北へ思いを馳せる時を多く持ちたい。

はみんぐ Bird の皆さんとの交流の様子

○国内体験学習プログラム／京都府丹後地方【春季】

■参加学生	
大河原洋子（文学部　歴史学科　2年次生）	金岡　舞花（経済学部　国際経済学科　2年次生）
中村　勇介（法学部　法律学科　3年次生）	石川　真帆（法学部　法律学科　2年次生）
大矢　誠志（法学部　法律学科　2年次生）	澤本　朱里（法学部　法律学科　2年次生）
棚瀬　真衣（法学部　法律学科　2年次生）	辻　　祐児（法学部　法律学科　1年次生）
松井　一通（理工学部　物質化学科　2年次生）	井嶋　紫乃（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）
木下　真穂（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）	三輪可那子（国際文化学部　国際文化学科　2年次生）
永田　紗瑛（政策学部　政策学科　3年次生）	加賀　雪菜（政策学部　政策学科　2年次生）
西山　大樹（政策学部　政策学科　1年次生）	
■テーマ　「丹後に出会う～地域資源（人・自然・歴史・文化）の活かし方」	
■協力団体　京都府立海と星の見える丘公園、NPO法人地球デザインスクール	

■行　程

日　時		行　程	場　所
3月13日（日）	8：00	京都駅出発	
	11：00	丹後海と星の見える丘公園到着 オリエンテーション	セミナーハウス　研修室
	12：00	昼食	食堂
	13：30	プログラム① 上世屋ガイドウオーク	上世屋
	15：00	プログラム② 里山の暮らし手仕事体験（藤織りしおりづくり体験）	合力の家
	18：30	夕食	セミナーハウス
	19：30	プログラム③ 丹後語り部の会	研修室
	21：30	入浴、就寝	宿泊棟、風呂棟
3月14日（月）	7：30	朝食	食堂
	8：15	移動	公園→飯尾醸造（株）
	9：00	飯尾醸造（株）見学	飯尾醸造（株）
	11：00	飯尾醸造（株）出発	
	12：00	昼食	園内　森のカフェ
	13：00	プログラム④ 里波見カントリーフレンズとの対談	森のカフェ
	14：30	プログラム⑤ 養老地域散策（海、里、山）	養老地域内
	18：30	夕食、入浴	食堂
	20：30	ふりかえり、就寝	風呂棟、宿泊棟
3月15日（火）	8：00	朝食	食堂
	9：00	波見ツアー・そば打ち体験	里波見地域
	12：00	昼食	セミナーハウス　食堂
	13：00	竹林整備ボランティア	里波見地域
	17：30	入浴	風呂棟
	18：30	夕食	食堂
	19：30	プログラム⑥ 星空ナイトウォーク	園内
3月16日（水）	8：00	朝食	食堂
	9：00	プログラム⑦ 郷土料理づくり体験	こどもの森、ことこと
	12：00	昼食	食堂
	13：00	大学生からの提案発表	こどもの森、ことこと
	15：30	公園出発	
	19：00	京都着	京都駅

大河原　洋子
（文学部　歴史学科　2年次生）

3泊4日の国内体験学習プログラムで宮津市に行きました。里山散策や満天の星空を見ることで豊かな自然を味わい、竹林整備ボランティアで自然の厳しさ、自然と向き合う方々の男気を知り、藤織りのしおりつくりと語り部さんのお話を聞くことを通じて宮津の伝統や文化に触れ、飯尾醸造の地元の活性化をはかって地元の自然を守っていこうとする姿勢を見ました。また地元の方々と交流、お話を聞くことで過疎化、少子高齢化の進む宮津で地元の方々が主体的にまちづくりに取り組み、まちを変えていこうとし、地元の良さをこれからに伝えていこうとする姿勢を強く持っていることを知りました。今回実際に現地に赴いて地元の方に直に話を聞き、現状を見ることで少子高齢化や第一次産業の衰退などの問題を実感することができました。地元の方々との交流を通じて、人のあたたかさに触れました。宮津は海も山もある自然豊かな素晴らしい場所です。でも何よりの特産は宮津の方々だと思いました。これからも定期的に宮津を訪れようと思います。

葛藤の言葉の由来、葛を初めて見ました

金岡　舞花
（経済学部　国際経済学科　2年次生

地方創生は日本人一人一人が考えなければならない問題だ。日本の食料自給率の低さと廃棄率の高さ、少子高齢化による福祉と税金、人口減少による地方衰退・消滅、後継者不足。私たちの生活を支えているものは第一次産業であり、その担い手は地方に居る。今日の日本には限界集落が年々増加している傾向にある。農業従事者の高齢化、住民の減少、後継者不足などの問題に直面している。彼らの問題は日本の問題である。交通アクセスや教育施設、医療サービスなどのことを考えると地方に移住者を増やすのは実際難しい。特に若い世代は貯金もなく雇用が多い都会へ集中する。地方で暮らしたいと考えるのは30代以後かリタイヤした人が多い。地方には美しい風景、きれいな空気、ゆったりとした生活、先人たちが培ってきた習慣からできた伝統など、お金に換算できない価値があると気づいている人が多いことがわかる。都会で生活する者は生産者のことをもっと意識するようにすること、地域の伝統と生活を守りながら生きている人がいることを知る機会を増やすことが大事だと思う。

養老地区の現状と取り組みについて考える様子

中村　勇介
（法学部　法律学科　3年次生）

宮津での3泊4日を通して、私の地域活性に対する考えや価値観は本当に変わりました。地域の方との交流をはじめ、伝統を伝えるにも現代に沿った変化を織り交ぜながら、革新の部分はしっかり後世へと伝えていく、そういった必要性を今回の国内体験学習プログラムで学びました。Ｉターン・Ｕターンされた方の宮津に対する思いや、今後展開していきたい活動への取り

最終日に地域活性化に向けた活動を班ごとに発表し、講評を伺う様子

組みのお話も伺うことが出来ました。みなさん強調していたのは、マンパワー不足の問題です。人口も年々減少しており高齢化が著しいため、若い方に少しでも宮津の魅力を知ってもらい、足を運んでもらえる活動を行いたいということでした。最終日には地域活性につながるアイデアを学生の目線から発表させていただきました。私たちが発表している時、みなさん真剣に話を聴きメモをとっておられました。本気で宮津を良くしたいというお気持ち、姿勢に心を動かされました。

石川　真帆
（法学部　法律学科　2年次生）

私が丹後地方の国内体験学習プログラムに参加した理由は、体験学習先の少子高齢化が進んでいるという現状が私の地元の現状と似ていたからです。同じような悩みを抱える地域に行き、都会に出た若者が戻り、新しい移住者を呼び込む取り組みについて知りたいと思い参加しました。

参加してみて、宮津には豊かな自然や美味しい食べ物、伝承されていく文化、そして宮津を盛り上げようという熱い気持ちを持った住民の方々など、魅力がたくさんあることに気付きました。特に感じたのが住民の方々の宮津への思いの強さで、みなさん宮津のことを大切に想い、その魅力を伝えていきたいとそれぞれの方法で熱心に活動されていました。

私の地元は徳島の三好市で、正直、長い間暮らしていたのに、地域のことをあまりよく知らず、故郷の魅力についても多く語れません。この国内体験学習プログラムを通して、地域の魅力を探る視点を持つことができたと思います。まずは自分の地元をそういった視点をもって巡り、改めて魅力を探してみたいです。

合掌造りの家と棚田が見える景色

大矢　誠志
（法学部　法律学科　2年次生）

高齢化が進み、若い労働力や嫁が不足している宮津市上世屋のような限界集落と、就活や婚活で「挫折した若者」。これら両者を結んで、若者の社会復帰を応援することが社会的・経済的価値の創造につながるのではないだろうか。就活支援センターや結婚相談所など各種の窓口と連携し、この地域を「再挑戦･再出発のまち」としてPRすることを提案したい。私たち学生の提案では天橋立などの観光資源を活用する意見も出ていた。しかし、私は持続的な事業を行うためには、こうした活動を通じて一定の収益を確保していくとともに、消費者や従業員、地域住民等が求める様々な社会的な課題に、現実的に対応していく必要があると考えた。

今回お世話になった丹後地区の方々との記念写真

澤本　朱里
（法学部　法律学科　2年次生）

国内体験学習プログラムに参加し、普段生活している環境とは違った場所での体験はとても貴重なものであり、時間が流れるのが早く充実したものになりました。限界集落というものを実際に自分の目で見たのは初めてのことで、皆さんが危機感を感じているのがよくわかりました。地元農家の方たちと協力してお酢を作り地域に貢献したり、地域密着型の憩いの場にしつつ、他の地域から来た人にもゆっくりとしてもらえる空間になるように試行錯誤したり、過疎地に人口を増やすため婚活イベントを行ったり、インターネット環境や、道路の拡幅を行うなど、皆さんの地域に対する思いはとても熱く、自分のためではなく、地域（地元）のためにという思いが私にも強く伝わってきました。このプログラムを体験して私ができることは何なの

かと、考えています。まずはできることから始める、SNSで発信する、今回体験する中で興味をもった法律の壁の問題を考える、などどんどんやってみたいと思います。

上世屋の棚田風景

棚瀬　真衣
（法学部　法律学科　2年次生）

3泊4日宮津市で様々な体験を行い、自然の素晴らしさ、地域の人々のあたたかさ、海の幸、山の幸の豊さを知ることができた。その反面、人口減少にともなう少子高齢化､若者の少なさ、空家の多さ、人手の少なさ、などといった負の問題にも向き合うことができた。このように宮津市にはたくさんの魅力があると同時に、超限界集落などの過疎の問題を抱えている。このまちに必要なのは、次に「つなぐ」ことだと私は考える。つながない限り消滅してしまう。そのためには就職や婚活の企画を工夫して考え、若い人たちが住みたいと思えるようなまちづくりを行っていく必要がある。私たちもこの4日間のプログラムで終わりにせず、素敵な宮津市を盛り上げていくため、これからも自分たちなりに考え提案していきたい。

山に登った時に海と海藻が見えた景色　この山には竹もたくさん生えていて、竹林問題となっている

辻　祐児
（法学部　法律学科　1年次生）

今回のプログラムを通じて、地域の方の温かさ、自然の偉大さ、地域の方の故郷を活性化させたいという強い思いを感じることが出来ました。地域の方の温かさの面では毎食地元の食材を使い手作りで食事を作って下さいました。またぜんざいやケーキなどもすべて手作りで作って出していただき、とてもうれしかったです。自然の偉大さについては星がとてもきれいですごく魅力的に感じました。一方、少子高齢化などにより手入れが難しくなった土地の景観が悪化して、獣害が多発しているということもわかりました。自然と共生していくことの難しさを改めて感じました。地域の方との対談の中で何とか若い人に来てもらおうと、土地や空き家の整備、婚活イベントを始めとする様々な取り組みをされており、地域の方の熱い思いを感じることが出来ました。これら以外にも多くのこの地域の魅力を知ることができたので、今後はこの魅力をどんどん発信していきたいです。

地元の食材が使われている食事
魚はもちろんわかめなども地元産です

松井　一通
（理工学部　物質化学科　2年次生）

春季国内体験学習プログラムに参加して現地で感じたことは、まずとにかく一度でいいから宮津市に特に若い人に足を運んでほしいという現地の人々の熱意です。職をリタイアしてから引っ越してくる方はいますが、若い人は田舎にはなかなか来てくれません。宮津市では米、野菜を作り、山で山菜を取ることができます。また、2年間漁師の修業をすれば自立して手に職をつけることが出来るのは宮津市ならではだと感じました。私は宮津市に来てほしいという思いだけで終わらないように、こんなに素晴らしい宮津市を知ってもらえるように、いろいろな

ところで講演会を開いてみてはどうかと考えました。田舎に住んでみたいがなかなか踏み出せない若い人はたくさんいると思います。

その人々の背中を押すのも迎える側の役目ではないかと感じました

飯尾造譲でお話を聞かせてもらい、その後、蔵を見せていただきました

井嶋　紫乃
（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）

今回、宮津市を訪問し、最も印象深かったのが、宮津市で生活する人の温かさ、そして、一人一人がそれぞれの背景、事情を背負いつつ、地域の活性化の為に自分たちが何をしたらいいのだろうかと試行錯誤している姿である。近所の人の姿が2、3日見えないと心配して訪問する、あるいは気軽にご馳走するというもてなしの心や、自分たちの住む場所の先々を考え次世代のために行動するという姿は、私の住む都会ではめったに目にすることのないものだ。宮津市では近年深刻な若者不足が問題になっており、ツアーの中で私たち学生が解決策の提案をする機会があった。私たちのグループでは、近隣の観光地を利用した宮津への訪問のきっかけ作りから、宮津を主体としたツアー、またリピーターを獲得するための企画を提案し、定住を目指したターゲットを絞ったアプローチを提案した。この提案に賛同する意見もある一方で、実現には難しいという指摘もしていただき、地域開発の難しさを実感した。地域の良さを多角的な方面から見つけ出し、提案していく面白さを体験することができた。

海と星の見える丘公園からの景色：大きな建物や強い光がないため、夕日や星空が市街地よりも一層きれいに見える

木下　真穂
（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）

今回の国内体験学習プログラムでは、4日間を通してたくさんの方と出会い、丹後地方の過疎の現状、問題解決に向けた取り組みなどたくさんのことを教えていただいた。宮津の方々の温かさ、やさしさに触れ、地域の自然に触れ、都市部の生活では感じることのできない人と人との繋がりを感じることができた。一日一日、一つ一つの経験が貴重なものであった。過疎地域の問題は、日本が抱える問題の縮図であると思う。東北での大震災を経験した日本は、今後のライフスタイルの転換が必要とされている。その見本になるような生活のあり方を、このプログラムを通してみることができたような気がする。この日本の問題には、私たち若い世代こそが行動していかなければならないと考える。そのためには、今回訪問したような過疎先進地に実際に足を運び、感じ、考えることが何より重要なことである。プログラムでの訪問で終わることなく、この地域の今後の地域活性化に主体的に関わっていきたい。

地元の方と郷土料理作り

三輪　可那子
（国際文化学部　国際文化学科　2年次生）

今回の国内体験学習プログラムでは、「超少子高齢化社会」により様々な課題を抱える地域を訪問し、大きく分けて2つのことを学んだ。1つ目は、高齢化が里山の生態系にいかに悪い影響を与えているかということである。山に人が入らなくなることで、獣害の増加や森林の荒廃が起こり、里山の生態系が崩れていく。1日目のエコツアーや3日目の竹林整備をやってみて、高齢化による里山の環境悪化を思い知らされた。2つ目は、宮津の人々が若年層を取り込むために様々な取り組みを行っていることを知ったり、皆さんの温かい人柄に触れたりしたことで、自分の田舎に対するイメージが変わったことだ。確かに若い人を田舎に定住させることは難しい課題ではあるが、いろいろな方法で懸命に取り組んでおられる皆さんの姿にとても明るい可能性を感じることができた。

学生から地域の方に提案発表

永田　紗瑛
（政策学部　政策学科　3年次生）

今回、この国内体験学習プログラムに参加したきっかけは、日本の中山間地域の活性化に興味があったためです。実際に地域に行き、地域活性化の為に活動されている方々に出会えるというところも魅力でした。様々な体験をした中で、印象に残っているのは竹林整備のボランティアです。高齢者が多い地域では、竹林が整備できずに手の付けられない状態になってしまっている現状を見て、とても問題だと感じました。竹林整備をされている方の、「お金にならないが、誰かがやらなければ里山はだめになる。」という言葉が忘れられません。

このような体験を通して、地域の活性化や環境維持には若者の力が必要なのだと実感しました。どうしたら若者が地域に行くのか、実際に行き地域の魅力を体験した私たちが、今後行動していく必要があると思います。

竹林整備のボランティア　足場の悪い斜面での作業は難しく、なかなか思うように進まなかった

加賀　雪菜
（政策学部　政策学科　2年次生）

私は、田舎にステレオタイプの価値観がありました。排他的な村（ムラ）社会といったイメージです。しかし、宮津の地域は、限界集落だからこそ、人々のネットワークの中で知らない人がいない環境で、また移動は困難だが海や山の幸は豊富に手に入ります。都会の便利な生活に慣れた人は敬遠してしまう気持ちも少し理解できた気がします。しかし、都会の人間関係は希薄で、無気力になりやすい環境の中にあるということも比べてみて実感しました。田舎には、人の温かみやコミュニティが強いという財産があります。今回のプログラムでは、生きる上で大切なことを学びました。田舎はゆっくりと時間が流れます。これからは、普段の生活で自分の時間を持ち、自分にできることは何でもいい

合掌造りの集落　京都市内とは全く生活様式が違い、冬には雪深くなる気候に適した家屋

からまず実行してみる、そういったことを始めていきたいと思います。

西山　大樹
（政策学部　政策学科　1年次生）

私はこのプログラムを通じて、たくさんの驚きと日本の未来を真剣に考えるきっかけを得ました。プログラムで訪れた宮津市の生活は、私が暮らしてきた環境と全く異なるものでした。集落の人口はかなり少なく、近くのコンビニまで車で20分、電車やバスはほとんどありません。しかし、きれいな自然や海がありました。なによりも地域の人たちのつながりがとても強いのです。これには本当に驚きました。今の日本は少子高齢化の時代です。さらに若者は都会へ出ていき、田舎の高齢者の割合がとても高くなっています。このことは以前から知っていましたが実際に自分の目で見てみると当たり前のことですが、そこで生きて住んでいる人がいました。都会の人たちは、そのことを見落としているような気がします。今後できるだけ早く地域に目を向け対策を取らなければ、ますます大きな課題として未来に残っていってしまうと強い危機感を感じています。

生まれて初めて、自分で魚をさばきました

○海外体験学習プログラム／台湾【夏季】

■参加学生	
家村　　篤（法学部　法律学科　2年次生）	市田　佳乃(社会学部　コミュニティマネジメント学科　2年次生)
遠藤　夏実（農学部　植物生命科学科　1年次生）	小松　　栞（国際学部　国際文化学科　1年次生）
杉原　陽太朗（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）	西田　周平（理工学部　物質化学科　2年次生）
廣田　大然（文学部　真宗学科　3年次生）	裵　　はに（文学部　歴史学科　2年次生）
■テーマ、引率教員	
学内企画「台湾で市民社会を問い直す　行動する市民・学生と交流する旅」 法学部　教授　西倉　一喜	

■行　程　2015年9月2日～9月8日　8日間

日　程	場　所	時　間	活動内容
9月2日（水）	大阪 台北	8：00 10：00 11：50	集合 チャイナエアラインにて空路　台北へ 台北着、景美人権パーク　視察 台北101　視察　【台北泊】
9月3日（木）	台北	午前 午後	民進党国際事務部政務副主任　陳婉宜氏との会見 台湾独立運動家　史明氏との会見 台北市内　視察 ジャーナリスト　デニス・エンバース氏との会見　【台北泊】
9月4日（金）	台北	午前 午後	台湾総統府、2・28記念館　視察 反原発市民団体　緑色公民行動聯盟との交流 共同通信社台北支局　訪問 鈴木局長による台湾情勢についてレクチャー 教科書問題学生団体との交流 台北市内　視察　【台北泊】
9月5日（土）	台北	午前 午後	第2原発、北部展示館　視察 反原発市民団体と交流 三貂角、九份　視察　【台北泊】
9月6日（日）	台北	午前 午後	新幹線にて台北より陸路　台中へ 鹿港へ移動、鹿港　視察 阿里山へ移動、阿里山地区　視察　【阿里山泊】
9月7日（月）	高雄	午前 午後	阿里山鉄道にて祝山へ移動、見学 台南へ移動、見学 烏山頭ダム　視察 高雄へ移動、高雄市内視察　【高雄泊】
9月8日（火）	高雄 大阪	 15：55 19：55	高雄市長　陳菊氏と会見、高雄市内視察 空港へ移動 チャイナエアラインにて空路　大阪へ 関西交際空港着、解散

家村　篤
（法学部　法律学科　2年次生）

今回の海外体験学習プログラムに参加して自分の台湾に対する見方が変わった。

台湾では、今、女性の力が見直されており来年の総統選挙では台湾初の女性総統が誕生する見込みだ。日本では、まだまだ政界での女性の力は弱いと思う。その点では、台湾を見習うべきだと思った。また市民団体との交流の中で、運動に参加する同世代の人たちの生の声を聞き、自分も国の政策にもっと関心を持たなければならないと感じた。私は、台湾での学習を通して女性の力、市民の力が活かされている社会だということに気付いた。

だが、その裏側には白色テロで奪われた命や人権があったことを忘れてはならない。当時、無罪であるにも関わらず裁判にかけられ処刑された人たちがいたことは隠すことのできない事実だ。だから私は自分がどれだけ恵まれた環境にいるかを見直し、この体験学習プログラムで得た刺激を日々の生活に活かしていきたいと思う。

景美人権パークで収監されていた方から当時の状況を教わった

市田　佳乃
（社会学部　コミュニティマネジメント学科　2年次生）

今回、この海外体験学習プログラムに参加して、台湾で起きている様々な出来事を学び、感じることができた。

東日本大震災によって引き起こされた原発事故後、台湾では反原発の声が多くなり、デモにより原発建設が凍結された。日本と台湾の原発に対する考え方や置かれている環境など、PR館を見学したり、反原発の活動をされている方にお話しを伺い比較することで、原発に対して自分の考えを持つことができた。

さらに、今、台湾では来年1月に行われる総統選挙に非常に注目が集まっている。民主化を進める最大野党の民進党を支持する人が多く、人々は今よりもさらに充実した“民主主義”を求めているということが分かった。台湾で出会った人々は、自分が行動すれば今の状況を変えられるという考えを持った人が多かったが、日本人にはそのような考えを持つ人が少ないのではないかと思った。

この7日間で受けたたくさんの刺激を今後の学生生活に活かしていきたい。

景美人権パークで郭さんにお話を伺っている様子

遠藤　夏実
（農学部　植物生命科学科　1年次生）

私がこの海外体験学習プログラムに参加しようとしたのには理由がある。一つは台湾が親日であることは以前から知っていたが、日清戦争以来、第二次世界大戦まで日本に統治されていたことを知らず、なぜ植民地が宗主国を慕っているのか不思議に思ったということ。もう一つは社会に意見をぶつけている同年代の人がどういう気持ちで行動を起こしているのかが気になったことだ。

実際に台湾へ行って、白色テロや民主化運動、原発反対運動や教科書問題を辿っていくことで、日本とは背景が違うこともあり完全に比較することはできないが、日本が見習うべき点が

2・28事件記念館にて、当時のお話を聞かせていただいた

いくつも見つかった。日本生まれ日本育ちの私からすると、台湾の人々はいつ、台湾人であるということを自覚しているのかという疑問が生まれたが、それらを解決するのは難しいことかもしれない。しかし、そのような複雑なバックグラウンドを持っている国の人が沢山いるということを知り、常識にとらわれてはならないと痛感した。

小松　栞
（国際学部　国際文化学科　1年次生）

台湾での海外体験学習プログラムに参加して、私は本や新聞、ニュースなどのメディアを通じた情報からは決して感じることの出来ない現実味を感じることができた。私は高校生の時に世界史の授業で、台湾の歴史について少し学んでいたのだが、言葉として頭では理解しても、現実に起こったことであるという感覚を持つことができなかった。しかし、今回のプログラムを通して、実際に現地に行って当事者にお話を聞かなければ分からないことがたくさんあるのだと痛感した。

このプログラムでは一つの要素にのみ注目して学習するのではなく、複数の要素に着目することで、あらゆる問題はつながっているのだということが分かった。このことから私は、興味がない出来事に対して無関心でいるのではなく、最低限でも知ろうとする姿勢でいることが大切なのだと学んだ。今回のプログラムでは、普通では会うことのかなわないような要人たちに直接会ってお話しを伺うこともできた。この貴重な一週間の経験を活かして、生の声を聞こうとすることや知る努力をすることを今後の学習に役立てていきたいと考えている。

史　明さん宅にて、対中関係について伺った

杉原　陽太朗
（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）

1週間にわたる台湾での海外体験学習プログラムの中で感じたこと、学んだことを紹介する。現在、台湾では学生を中心としたグループが教科書改訂の問題や原子力発電所の建設問題で市民運動を行い、その動きが活発になっている。彼らの積極的な運動を促すものは何なのか。台湾の人々にとっての民主主義は何なのか。それを考えるためのプログラムであった。

最も自分にとって有意義だったのは、教科書改訂問題で政府への抗議活動をする学生たちとの交流である。台湾の歴史で重要な部分を教えずに中国の歴史観に沿って教科書を作り、人権侵害の事実をうやむやにしようとする政府への怒り、歴史認識への葛藤などを彼らは語ってくれた。今、声をあげないでいつ声を上げるのかという切迫感は、私たち日本人が感じないものだ。

一つの国としての台湾を求め、民主主義を求める闘いに参加した世代が現代の市民運動の下地を作り、連綿として「自分たちの国は自分たちで創る」という精神が受け継がれているのだと実感した。

西田　周平
（理工学部　物質化学科　2年次生）

今回の海外体験学習プログラムで訪れた台湾は、日本と1時間しか時差がなく、気候もよく似ていた。

私は今回のテーマの1つでもあった原発問題について興味があった。日本での東日本大震災以降、台湾でも原子力発電への関心が高まっており、台湾では、学生や市民が自ら立ち上がり、行動を起こし、原子力発電所を建設中止にまで追い込んだ。台湾も日本と同じ島国であり、地震国という点も日本と似ている。台湾で東日本

反核運動の方々との交流

大震災規模の大地震が起これば、台湾の国土から考えても、国中に甚大な被害がでることは確実である。台湾では原子力発電の問題は1都市の問題ではないということだ。

高雄では市長の陳菊氏に会うことができた。市長との会談の中でも原発問題が話題に上がったことは、私にとって大変印象的だった。

廣田　大然
（文学部　真宗学科　3年次生）

今回の夏季海外体験学習プログラムでは、多岐にわたり近現代の台湾を学ぶものであった。教科書問題、白色テロ、二・二八事件、原発問題、ひまわり運動、政権交代の動きと民主主義、市民社会等がテーマであったが、特に教科書問題について報告したい。

現在、台湾では社会科の教科書記述を論点に市民･学生が抗議活動を行っている。私たちは、教科書問題運動を行う高校生達と話す機会を得た。政府による歴史的見解の隠蔽と虚偽に揺れ、外省人として家族との政治的な見解の差違に複雑な想いを寄せる彼らの姿が会談から垣間見られた。本当のことを話さない政府の教えを学ぶ中で培われた二つの国民性が彼らの中で構築されていた。その中で、真実を求めて彼らは市民として立ち上がった。

日本も今､教育の大きな転換期を迎えている。市民としてそのあり方を求め運動している彼らの姿は、私たち日本の学生の近未来像なのかもしれないと感じた。

教科書問題に取り組む学生団体との交流

裘　はに
（文学部　歴史学科　2年次生）

台湾の「過去」と「現在」を間近で見聞きし、今まで関心の低かった台湾について深く知るに連れて、台湾そのものへの知識が以前より増したのはもちろん､「民主主義とは何なのか」､「正しい歴史認識とは何なのか」など、政治や歴史についてもっと知りたいと思うようになった。また、もうひとつ私が強く関心を惹かれたのは「アイデンティティ」の問題だった。私自身がマイノリティに属するため、そういったものに何か特別な感情を抱くようになった。私は様々な書籍や映像を通して事前学習を進めるうちに、台湾の抱える様々な問題を扱う際に、「外省人」「本島人」などといったカテゴライズを前提としなければいけないという意識を持っていた。その人物がどの人なのか、それを考えないと問題の本質への接近が難しいと考えていたからだ。しかし、実際、現地で学生の話を聞いているうちに、その区別意識は現在ではもう、ずいぶんと薄くなってるようだと感じた。それはまだ表面上的なものなのかもしれない。日本におけるマイノリティ問題とは、もっと違う次元であるのかもしれない。ただ、私はその現在の台湾を通して、この先の日本に夢を見たのだった。

台湾での7日間、様々な分野、立場の方々に会ってお話を伺っていくうちに、自分自身の考えが深くなっていくのを実感できた。これを機会により社会に興味を持ち、学習していきたいと強く思った。

景美人権パークにて　戒厳令の敷かれた時代を生き、実際に投獄された郭さんからお話を聞いた

引率教員講評
西倉　一喜（法学部　教授）

今年の夏休みも昨年に続き学生を率いて「近くて遠い国」台湾で体験学習を実施した。テーマは二年続けて「台湾の市民・学生との交流」で同じだった。昨年は台湾での反原発運動や「ひまわり学生運動」の盛り上がりを受けて、日本

の若者はどうして政治参加への関心が低いのかという問題意識を持っての交流だった。今年は安保法反対で日本の若者の一部が政治運動に立ち上がる兆しを見せたことから、これが国政レベルの政治変革にどうつながるかを台湾の昨年来の変化と比較しつつ両国の民主主義と市民社会の在り方を問い直すことになった。

こうした狙いから私がジャーナリストとして台湾で培ってきたコネクションやリソースを駆使して組み立てたのが6泊7日の今回の日程だった。その中で共同通信台北支局（鈴木雄士支局長）から交流の会場提供などの全面的バックアップも受けたことを指摘しておきたい。事前学習として原発問題では福井原発銀座の現地フィールドワークを実施し、龍大の先輩で反原発市民活動家の山崎隆敏さんと共同通信福井支局敦賀通信員で原発問題を専門に取材している桑島圭記者にそれぞれの立場からのブリーフィングをお願いした。歴史的な日台、中台関係では「悲情城市」「セデック・バレ」「海角7号」「KANO」などの映画作品を取り上げ、感想文を皆で共有した。また民主化のプロセスなど台湾に関する基礎知識を習得するために何冊かの必読図書を指定した。事前学習ではフェイスブックに参加者限定の非公開グループを開設し、情報交換や切磋琢磨の場とした。こうして事前学習の目標を完全にこなすことを前提に、台湾を対象とした地域研究のフィールドワークともいえる今回の体験学習旅行に臨んだ。

交流の記録を残すために参加学生に交流の撮影、録画、録音の役割を振り分けた。ちなみに昨年は帰国後に録画を編集し、映像作品に仕上げた「龍大生がひまわり運動に迫る」が学内の映像コンテストで総合グランプリを獲得した。

さて台湾で実施した具体的な交流体験を簡単に総括したい。まず初日の景美人権パークの訪問は、国民党の一党独裁下の政治状況がいかに苛酷なものであったかを日本の若者に知ってもらう目的があり、非公開の軍事裁判や人権を無視した政治犯の待遇を生き証人に肉声で語ってもらった。台湾の民主化はその住民が多くの犠牲の上に自らが勝ち取った政治変革であった。これは台湾アイデンティティの主張とともに2. 28記念館や総統府の視察にも共通するテーマだった。

反原発市民運動については台北の緑色公民行動聯盟と第四原発のある貢寮の地元住民団体と交流した。福島原発事故の衝撃で盛り上がった反原発のうねりで第四原発は建設中止となり、現在は「封鎖」状態にある。一つの山を越えた運動は沈静期にあるが、次の目標の廃止に向けて地道な活動を続けている。

学生運動は昨年の大学生中心の「ひまわり学生運動」から高校生を中心とする教科書改悪反対運動に引き継がれている。共同通信台北支局での交流会で彼らが主張したのは国民党政権が公民の教科書の台湾主体の歴史を中国主体の歴史に改悪した内容が問題なだけでなく、改定が「ブラックボックス（密室）」の中で強行されたことに対する異議申し立てだった。

昨年来の市民･学生運動は「非暴力直接行動」の方式を貫くことによって一般市民の共鳴を勝ち取り、国政レベルでの変化を引き起こしている。昨年の統一地方選挙では野党、民進党が大躍進し、民進党幹部や内外ジャーナリストによれば、来年1月の総統選挙では民進党候補の蔡英文女史が当選し、政権交代はほぼ確実な見通しだ。

台湾最後の日は民進党指導者の陳菊・高雄市長と会見することができた。1979年に民主化運動活動家として「美麗島事件」に連座し、12年の実刑を軍事法廷で言い渡された政治犯の経歴を持つ。陳市長は自らの苦難の道をふり返るとともに市民・学生運動との連帯で台湾の民主主義がさらなる進歩を遂げるだろうとの抱負を語った。

かつて台湾人は日本を先生として近代化を学ぼうとした。今や日本人が民主主義や市民社会の在り方について台湾に学ぶべきだと痛感した。

陳　菊　高雄市長との会見後、全員での集合写真

○海外体験学習プログラム／タイ王国【夏季】

■参加学生	
田端あづさ（文学部　歴史学科　4年次生）	林　こころ（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）
姫野　聖香（文学部　英語英米文学科　3年次生）	渡部　熙生（経済学部　国際経済学科　4年次生）
■テーマ、企画団体	
学外企画「“新しい復興のカタチ”を訪ねる旅 ～インド洋大津波の被災地を訪ね、ネパールや日本に活かす～」　ツナミクラフト	

■行　程　2015年8月27日（木）～9月4日（金）　9日間

日　程	場　所	時　間	活動内容
8月27日（木）		22：00	関西国際空港集合　【機中泊】
8月28日（金）	関空発 バンコク着 バンコク発 プーケット着	00：30 04：20 07：45 09：10	 プーケット市内視察 プーケットモンテッソーリスクール訪問　【プーケット泊】
8月29日（土）	カオラック		カオラックへ移動 カオラック　市内散策 津波による被災から早期に復活したホテルに宿泊 【カオラック泊】
8月30日（日）	ナムケム村		ホテルの日本人従業員と交流 ナムケム村へ移動、漁村探索 児童福祉施設（旧津波孤児施設）で子どもたちと交流 バーンタームナムチャイ（津波避難所兼青少年育成施設）視察、宿泊　【ナムケム村泊】
8月31日（月）	パトン島		パトン島へ移動、幼稚園見学 コミュニティ・デビロップメント・センター（CDC）視察、津波メモリアルパーク視察 専用車でクラブリへ移動 現地旅行社でブリーフィング、 電気のない島に船で移動 ホームステイ　【パトン島泊】
9月1日（火）			托鉢体験 パトン島内視察、サバンナ見学 ホームステイ　【パトン島泊】
9月2日（水）	クラブリ		ライオン村視察 シーカヤックにて海上から島を視察 船でクラブリへ移動　【クラブリ泊】
9月3日（木）	 プーケット発 バンコク着 バンコク発	 20：35 22：00 23：30	現地旅行社にて振り返り プーケット国際空港へ移動　【機中泊】
9月4日（金）	関空着	07：00	関西国際空港着 解散

田端　あづさ
（文学部　歴史学科　4年次生）

この海外体験学習プログラムは、私にとってたくさんの驚きとたくさんの気づきを与えてくれた。2004年に起きたインド洋大津波の被災地を訪れ、そこで学んだことをネパールや日本に活かすというテーマのもと、多くの被災地を訪れ、様々な体験をしてきた。しかし、震災や防災という枠組みだけではなく、タイという国の様々なことを知ることができるツアー内容であったように思う。そして、タイという国について知れば知るほど、日本との違いや日本の矛盾点に気づかされ、タイだけではなく日本についてももっと知りたいと思うようになった。日本以外の国を知ったことで日本を客観的に見て考える視点に気づけたこと、そして、日本の現状や政治にも関心を持てるようになったことが、このプログラムを通して1番成長できたことだと感じている。

6カ国語に対応している津波警報システムのあるパトンビーチ

林　こころ
（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）

10年前に起きたスマトラ沖地震によるインド洋大津波の被災地を訪れた。タイ王国で感じたこと・学んだことは沢山あるが、特にタイでの復興に対する姿勢が日本のこれからを考える上で必要だと実感した。

復興に対する姿勢ではコミュニティーの声を聞いて、ニーズに合った対策をすることが大切だと思った。実際にタイではコミュニティーの声を聞かずに復興住宅を造ったために、ゴーストタウンと化した場所があった。タイで起きた出来事は日本でも起こるかもしれない。決して他人事ではないと思った。

私にとって復興とは何なのか、未だよく分かっていない。これからもずっとその答えを探し続けるだろう。だが、東日本大震災の被災地を支援しながらも、これからの防災対策に携わりたいと改めて強く思った。

人がほぼ住んでいないゴーストタウンと化したライオン村

姫野　聖香
（文学部　英語英米文学科　3年次生）

タイ王国における海外体験学習プログラムにおいて、私は復興に携わる過程での姿勢の素晴らしさと、そこで生活し日々を生きる人々の暖かさが深く心に残った。現地住民が主体的に復興について話し合い、結果、毎年多くの人々が訪れる世界有数の美しいリゾートが生まれたことを学んだ。また外国人だとかは関係なしに誰もが手を合わせ笑顔であいさつを交わす優しい文化に触れあうことができた。

タイ王国を訪れたことにより、私は“今を生きる人々が本当に必要とすべきものは何なのか”という疑問を抱いた。それは現代日本のように、お金や便利な近代的物質に囲まれた生活なのだろうか。それとも、タイ王国で触れ合った人々のように、必要最低限の物しかなくとも、手を取り合える心の豊かさなのか。日本における答えを出すためには、各個人が物事の本質を

電気のない島でのタイの絞り染め体験

見極め、見定めていくことが重要となってくる。学び伝えていくことの重要性を念頭に、自主的に、ただし相手を理解した上での次なるアクションを起こせるように頑張りたい。

渡部　熙生
（経済学部　国際経済学科　4年次生）

タイ王国は約11年前に被災したとは思えないほどの復興を遂げていた。7日間の海外体験学習プログラムは私の今後の人生に活かせるような発見が多く含まれたプログラムだった。

タイ王国の震災復興の形から人のつながりや地域住民の声を大切にしていることを感じた。日本ではあり得ない地域住民主体の復興にはとても驚いた。また人のつながりやあたたかさからタイ王国が微笑みの国と言われる理由がよく分かった。

タイ王国の震災からの復興の形には日本に活かすべきものがたくさんあると感じた。日本はタイ王国に比べて様々なことが便利になっている。しかし、それに比例して豊かな生活を送れているかと考えるとそうではないと思う。日本では薄れつつある人のあたたかさや繋がりの深さを感じるうちに、本当の豊かな生活とは何かという課題を与えられた。

タイ王国での7日間は今後に繋がるとても充実した経験となった。

カオラックラグーナリゾートで震災当時の話や復興までの道のりについて学ぶ

○海外体験学習プログラム／インド共和国【春季】

■参加学生	
金岡　舞花（経済学部　国際経済学科　2年次生）	渡邉　由梨(社会学部　コミュニティマネジメント学科　3年次生)
富樫　千佳（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）	橋本　　翠（農学部　食料農業システム学科　1年次生）
古川こむぎ（農学部　食料農業システム学科　1年次生）	
■テーマ、企画団体	
「持続可能な暮らしと農業を考えるインドの旅」　公益社団法人全国愛農会	

■行　程　2015年3月1日（火）～3月10日（木）　10日間

日　程	場　所	時　間	活動内容
3月1日（火）	伊丹空港	17：40 18：30 19：35	集合 伊丹空港出発 羽田空港着、リムジンバスにて成田へ移動 【成田エアポートレストハウス泊】
3月2日（水）	インド・デリー	12：00 21：20	成田空港出発→インド・デリー着 夜行列車でアラーハーバードに移動　【列車泊】
3月3日（木）	アラーハーバード	06：50 午後	アラーハーバード着 継続教育学部オリエンテーション キャンパス＆農場ツアー 【サム・ヒッキンボトム農工科学大学継続教育学部泊】
3月4日（金）	アラーハーバード	午前 午後	農村訪問（母子保健活動、裁縫教室）ハルディ村、ダラ村 継続教育学部にて母子保健活動についてディスカッション ハンディクラフト製作プロジェクト視察 【サム・ヒッキンボトム農工科学大学継続教育学部泊】
3月5日（土）	アラーハーバード	午前 午後	アーシャ学校見学＆ AOAC 農家訪問 アーシャ学校生徒との交流 カリヤン村訪問 【サム・ヒッキンボトム農工科学大学継続教育学部泊】
3月6日（日）	アラーハーバード	午前 午後	礼拝参加（希望者のみ） アラーハーバード市内観光、ショッピング アーナンドバワン、サンガムにて夕日を眺めながらボーティング 【サム・ヒッキンボトム農工科学大学継続教育学部泊】
3月7日（月）	アラーハーバード	午前～ 午後	継続教育学部での1日体験実習 グループに分かれ、石窯を使った食品づくり、菌床マッシュルーム作り、インド料理体験、鶏肉加工（鶏のと殺＆スモークチキン作り） 交流会＆お別れ会 食事会 【サム・ヒッキンボトム農工科学大学継続教育学部泊】
3月8日（火）	アラーハーバード・デリー	午前 午後 21：30	シェアリングセッション 評価会 夜行列車にてデリーへ移動　【列車泊】
3月9日（水）	デリー	07：05 午後 20：30	デリー着（午前中はホテルで休憩） ※ Cotege emporium（Janpath） 夕方、デリー空港へ移動 デリー発　【機中泊】
3月10日（木）	伊丹空港	07：00 12：30	成田空港着 成田空港→リムジンバスにて羽田空港へ移動→伊丹空港 伊丹空港着、解散

金岡　舞花
（経済学部　国際経済学科　2年次生）

愛農会の皆さんとインドへ行ってきました。早朝の農作業から始まり一日中ハードなスケジュールな日もありましたが、とても充実したプログラムでした。観光などでは見ることができない農村の人々の生活や、小学校の子ども達との交流、インドで暮らしている人々と話す機会をもつことができてとてもうれしかったです。

私達が滞在した継続教育学部で学ぶインドの生徒と話していたとき、その生徒は、なぜ日本のような先進国から途上国であるインドに日本人が来るのかわからない、インドは先進諸国に学ばないといけないと言い、私はそのときとっさに答えられませんでした。先進国で飽和している市場を途上国に広げていくために、多くの日本人がインドに注目しているからだとインドに行く前は思っていました。しかし彼らの生活や街の様子を見ていく中で、私の考えは変わりました。農村は貧困に苦しんでいると思っていましたが、農村の人々には農村の人々のルールがあり、伝統を守って暮らしていることを不幸だとは感じていません。彼らの価値観に触れるたびに、私は彼らが作っていく社会の先に、持続可能な発展できる未来があるのではないかという期待が大きくなっていきました。もっと彼らのことが知りたいです。

今回の海外体験学習プログラムに参加できたこと、彼らと出会えたことに感謝します。

村の子ども達
政府から支給された制服も大事な私服の一つになっている

富樫　千佳
（国際文化学部　国際文化学科　3年次生）

インドは、英語が準公用語であり、多くの人が英語を話せる。一体、どのような教育がなされているのか。私は、インドにおける英語教育と日本との違いについて学ぼうと思いこのプログラムに応募した。実際に現地に行ってみると、英語を話せる人というのは、とても限られた人達である事がわかった。週末の教会（キリスト教）では、お祈りも、生誕祭もすべて英語で行われている。こういう人々は富裕層で、高い月謝を払って学校に通わせているのだという。一方で、農村ではほとんどの人が英語を話せない。農村の学校にも訪問させていただいた。そこは政府の学校だが、なんと学校の先生が授業に来ないため授業ができない状況だという。たった一人来ていた校長先生に、授業内容を聞いてみると、ヒンディー語、数学、サンスクリット語、英語、農業の知識だという。インドはIT産業などの発展や、0の概念等、教育水準は高いように見えるが、実際は貧富の差による教育の格差というのが存在している事がわかった。アーシャの会では、このような農民にも教育を提供するために学校の設立も行っている。このようなNGOの取組みは、とても重要だと感じた。

母子保健活動の様子

橋本　翠
（農学部　食料農業システム学科　1年次生）

クラクションの騒音、物乞いをする老婆、飛び交うたくさんのハエ、全てが日本と異なっている国でやっていけるのか不安で仕方がなかった。しかし、このプログラムを通じて日本にいては体験できなかったことを体験できた。

特に印象に残ったことは母子保健活動と有機農業の視察である。

母子保健活動では緑黄色野菜の摂取を呼びかけたり、赤ちゃんに母乳をあげることの大切さを説いたりしていた。昔からの慣習や電気・水道の設備が整っていないことから生活環境が

整っていないと実際に農村を視察して感じ、母子保健活動の重要性を感じた。

有機農業を行うと、化学肥料を用いた農業よりも雑草が多く生えるため労働力が必要になる。よって多くの人々に仕事を提供することができるようになったことを知った。

これらの知識は実際に視察し、現地の人と話さなければ手に入れられなかった。このプログラムで得た知識や考え方を活用して学生生活を送っていきたい。

古川こむぎ
（農学部　食料農業システム学科　1年次生）

なぜわざわざインドにまで行って持続可能な農業を学ぶのか、私は正直よく分からなかった。

私たちは継続教育学部の生徒達が有機農法で作った野菜を朝市で売る様子を見学した。購入するのはお金を持っている中間層以上の人達ばかりらしい。てっきり私は貧しい人々に売るために野菜を作っているのだと思っていたので、それでは最下層の人にお金が回らないと思った。でもよく考えるとインド人の日収が140ルピーに対して、有機栽培された日本米が140ルピーから200ルピーなので、貧困層の人が買えるはずがない。だから、継続教育学部ではできるだけ長い間収穫できて、栄養価の高い植物の栽培方法を貧困層の人々に教えている。そして、技術を学んだ人が自身の村に持ち帰って広めることにより、持続的に農業が発展していくことを目指している。

農村部では識字率が低いことなどの理由から、有益な情報が十分に行き届かないため、このようなやり方がインドには適しているのではないかと思った。これがインドの持続可能な農業なのだ。

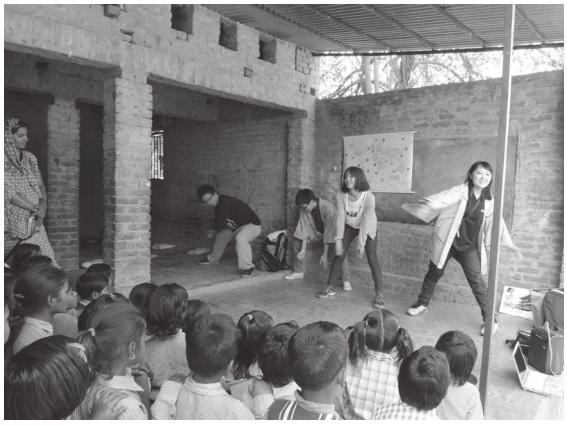
市場の見学

私は学んだことを今後の大学生活に生かしていきたい。

農村地区で出会った子ども達と一緒に村を歩く

渡邉　由梨
（社会学部　コミュニティマネジメント学科　3年次生）

私はインドにおける男尊女卑問題について関心があったため、参加を決意しました。実際にインドへ行ってみて、日本と同じように男女が食堂のところで隣同士で座っていたり、肩を組んでいたり、日本で見る光景と同じでした。ですが、同行してくださった中西さんのお話では、「彼らは付き合ってはいるけれど結婚をしない。結婚相手は親の紹介の人とする」というお話を聞き、衝撃を受けました。私は恋愛結婚が一番幸せであると考えていましたが、インドの若者にとっては、親が紹介した人が絶対で、その人と結婚をするのが一番の幸せであると考えていることに、ショックを受けました。私が、当たり前のことと考えていたことが、住んでいる環境や文化が異なることで、感情や考えまでもが違ってくるということが学べ、とても嬉しく思いました。今回海外体験学習プログラムに参加して本当にたくさんのことを学べました。


よさこいソーランを踊って子ども達と交流

事 業 名	体験学習プログラム報告会
日　　時	2014年度　春季：2015年４月22日（水）17時30分～19時30分 2015年度　夏季：2015年10月15日（木）17時30分～19時30分 2015年度　春季：2016年４月19日（火）17時45分～19時45分
場　　所	2014年度　春季：瀬田キャンパス　6号館プレゼンテーション室 2015年度　夏季：深草キャンパス　和顔館202教室 2015年度　春季：瀬田キャンパス　6号館プレゼンテーション室
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	2014年度春季：61名、2015年度夏季：71名、2015年度春季：61名

1. 経緯・目的

国内・海外の体験学習プログラムに参加した学生が、現地でどのようなことを学び、考え、今後のボランティア活動や大学生活等にどのように活かしていくのかを発表する機会として、プログラムの一環で報告会を行っています。より多くの学生に本プログラムに関心をもってもらうため、誰でも報告を聴ける形で実施しました。

2. 概要

参加した学生が、プログラムごとに、プログラムでの体験を通じて学んだことをそれぞれのスタイルで報告しました。プログラムに参加した学生以外に、プログラムに関心を持つ学生や、受け入れ先（スタディツアー企画団体）のNPO の方にも参加いただきました。発表概要は下記の通りです。

	訪問地・参加者人数	テーマ
14年度 春季	パラオ共和国 参加者：10名	「島嶼社会における環境、平和、国際関係を考える旅」
	フィリピン共和国 参加者：6名	「貧困の中で生きる人々と出会い、向き合う旅」
	富山県南砺市 参加者：15名	「富山・五箇山・合掌の里グリーンツーリズム体験」
15年度 夏季	台湾 参加者：8名	台湾で市民社会を問い直す　行動する市民・学生と交流する旅
	タイ王国 参加者：4名	“新しい復興のカタチ”を訪ねる旅　～インド洋大津波の被災地を訪ね、ネパールや日本に活かす～
	岐阜県揖斐川流域・垂井町 参加者：15名	フェアトレードタウンを目指す町　垂井～揖斐川流域から提案する穏豊（おんぽう）な社会～
15年度 春季	インド共和国 参加者：5名	持続可能な暮らしと農業を考えるインドの旅
	福島県福島市、南相馬市、本宮市、郡山市 参加者：15名	～福島の「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～
	京都府丹後地方 参加者：15名	丹後に出会う　～地域資源（人・自然・歴史・文化）の活かし方～

3. コーディネーター所感

願書を出し、選考を経て参加決定した学生達は、事前学習会でたっぷり勉強して出発に備えます。体験後には事後学習会で活動を振り返り、学びを深めていきます。レポートを書き、報告会に向けて全員で発表資料を作成し大勢の前で発表しますが、この一連のプログラムで、学んだことを改めて共有し、より学びを深めることができていると感じます。参加後も、国内・海外での様々な社会問題への関心を広げていってほしいと思います。

〈報告者：古澤登美代
（瀬田キャンパス　コーディネーター）〉